

## 井上ひさしの読書眼鏡

## 世界の真実、この一冊に

ごく稀に、「この一冊の中に、この世のあらゆる苦しみと悲しみ、そして喜びが込められている、ひっくりかえり、世界の真実のすべてがここにあり」と、深く感銘をうけ、思わず拝みたくなるような書物に出会うことがあります。中村哲さんの『医者 井戸を掘る』(石風社)は、まちがいがなく、その稀な一冊でした。

中村さんは一九四六年、福岡市の生まれ、ここ十八年間、パキスタン北西の辺境州の州都ペシャワール市を拠点に、ハンセン病とアフガン難民の診療に心身を捧げている医師で、略歴にはこうあります。

『パキスタン側に一病院、二診療所、アフガン国内に八診療所を持ち、年間二十万人を診療するNGOペシャワール会の現地代表』。この中村さんが日本の青年たちや現地七百の人たちと、アフガニスタンに千本の井戸を掘ることになったのは、昨年夏にユーラシア大陸中央部を襲った史上空前の大旱魃のせいでした。その被害はアフガニスタンにおいてもっともひどく、『千二百万人が被害を受け、四百万人が飢餓に直面、餓死寸前の者百万人と見積もられた(WHO、二〇〇〇年六月報告)』。

幼い子どもたちの命が赤痢の大流行で次々に奪われて行くのを診療所で目撃した中村さんは、その原因が旱魃による飲料水の不足によることを突き止め、こう決心します。『医師である自分が「命の水」を得る事業をするのは、あながち掛け離れた仕事ではない……』

こうして中村さんは、もちろん診療行為をつづけながらですが、有志と力を合わせて、必死に井戸を掘りはじめます。これはその一年間の苦闘の記録です。すぐれた書物はかならず、功まずして読み手の心を開かせるユーモアを内蔵しているものですが、ここにもたくさんの愉快なエピソードがちりばめられています。たとえば井戸を掘る道具がそう。五十米、六十米と掘り進むうちに、牛ほどもある



## 井上ひさしの読書眼鏡

巨礫にぶつかる。これを取り除くために、石に穴を穿ち、そこに火薬を詰めて爆破しなければならぬが、現地人担当者は、なんと内戦中、ソ連軍を相手に活躍したゲリラの指揮者の一人で『したがって、爆発物の取り扱いには慣れていて、大いに活躍した。埋設地雷やロケット砲の不発弾に上手に穴をあけて火薬をかき出す。その入手経路が彼が引き受けて調達した。同じ爆破でも、相手が人間の殺傷ではなく、逆に（人間を）生かす仕事であったから、生き生きと働いた。』

また、石に穴を穿つ道具は、なまなかのノミではすぐ使えなくなってしまう。そこで、『ノミは（ソ連軍が遺棄して行った）戦車のキャタピラの鋼を使い、強靱で摩耗が少なくなった。地雷や戦車もこうして「平和利用」となり、あの戦乱を知る者は多少溜飲を下げた。』

中村さんたちの得た報酬はなにか。現地の作業員が一人、亡くなったことがある。滑車で跳ね飛ばされて、井戸の底に墮落してしまったのだ。お悔やみに出かけた中村さんたちに、作業員の父親が云う。

『こんなところに自ら入って助けてくれる外国人はいませんでした。息子はあなたたちと共に働き、村を救う仕事で死んだのですから本望です。全てはアツラの御心です。……この村には、大昔から井戸がなかったのです。皆汚い川の水を飲み、わずかな小川だけが命綱でした。……その小川が涸れたとき、あなたたちが現れたのです。しかも（その井戸が）一つ二つでなく八つも……人も家畜も助かりました。これは神の軌跡です』

こういう言葉を報酬として、そしてそれに励まされながら、中村さんたちは井戸を掘りつづける。読み進むうちに、わたしはひとりで、アフがニスタン全土に井戸のポンプが立ち並ぶ日のくることを祈っていました。この無償の行為が天に届かぬはずはない。

